

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

現代社会におけるアイヌの工芸の在り方：
観光をとおした研究に向けて

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5601

研究ノート

現代社会におけるアイヌの工芸の在り方

—観光をとおした研究に向けて—

齋 藤 玲 子*

Ainu Crafts in Contemporary Hokkaido: An Overview for the Study of Acculturation and Cultural Mobilization through the Tourism

Reiko SAITO

This report is a note on the study of social and economic meaning of Ainu crafts in contemporary Hokkaido.

The superb skills and characteristic designs of Ainu crafts were admired by the *wajin* (come from Honshu; southern Hokkaido) from the middle Edo era, two hundreds years ago. More than seventy years ago, these crafts were sold as souvenir for tourists.

However, previous studies on Ainu culture placed more emphasis on the reconstruction of “traditional” culture, and the study on contemporary crafts as a result of acculturation and as a cultural mobilization was not considered an important investigation.

The major points necessary to proceed the research the problem are as below;

1. Fundamental datas;

Population and character of the people concerned with tourism

Survey of Ainu crafts and souvenir shops

Number of the tourists, etc.

* 北海道立北方民族博物館学芸員

キーワード アイヌ、工芸、芸術、現代の北海道、観光

Key Words Ainu, Craft, Art, Contemporary Hokkaido, Tourism

2. Organization and manufacturing system / Marketing system
3. Social and economic meaning
4. Prospects of succession of the art and finding a new market

Although there is great difficulty in researching the above items, such studies are important and should be beneficial to the people bearing Ainu culture.

1. はじめに

工芸（衣服を含む）や舞踊など民族固有の「芸術；art」は、「言語」とならんで、先住民族の文化復興をめざす活動や民族意識のシンボルとして代表的なものとなってきた。しかし、多くの先住民と同様に北海道のアイヌにおいても、それらは近代化の過程でマジョリティーの文化にのみこまれて日常生活とは切り離されてきており、研究者や自己をアイヌと認識する人の中にも、古来の文化要素はいったん途絶えたと考える人がいる。

一方で、民族文化復興運動の高まり以前から、観光業においては民族芸術の一端が演出されたり販売されたりしながら、現在までもその知識や技術が継承されている。これら観光の場における文化は、「伝統的」な文化とは異なるものとして考えるべきなのであろうか*1。「伝統」や「文化」は生産・創造されるものだという認識が、多くの理解を得られるようになってきているこんにち、観光はそれを例証する格好の材料として研究されてきている。

社団法人北海道ウタリ協会の活動にもみられるように、福祉に力を入れてきたそれまでに比して、1970年代後半からは文化の継承が重要なものと位置付けられるようになり、若い世代の中にもアイヌ語や舞踊、物をつくる技術などの習得と向上に努める裾野がひろがってきている。これらの活動は、総人口の多い札幌市を除けば、観光地となってきた地域をはじめとして盛んであるといえる。

現在、観光業に従事しているのはアイヌの人口の1割に満たないと考えられているが、いわゆる一般の和人は観光地の人々からアイヌ全体を認識している〔成田・花崎 1985：235、ピープルズ・プラン21 1989：50〕と指摘される。アイヌ文化についてよく知らない人々にとっても、観光地はアイヌ文化の一端に気軽に接することのできる場となっている。ここで、物の由来や使い方あるいは踊りの意味の説明をしたり、質問に答えたりすることが求められることから、観光業の従事者でアイヌ文化を積極的に学ぼうとする人が少なくない。これらは職業上の必要のみならず、自文化に対する誇りとアイデンティティの形成にも関与していると考えられる。そして、技術や知識を身につけ、自分なりのアイヌ民族観を持った人が、さまざまな活動の場でリーダーとなり、民族文化の普及や後継者

の育成等に努めている例が多数ある。

観光地は、(訪れる側にとっても受け入れる側にとっても)単なる見世物の場ではなく、アイヌ民族文化の存在とその理解の場になりつつある〔大塚 1994:19〕という見解がある。それらの多くは民族芸術を介して行われ、そこで用いられるものは商品となっているわけである。「みやげ」としての工芸品は、アイヌの側からは何を「アイヌ文化」としてアピールしたいのか、観光客にとって何が「アイヌ文化」として消費されているのかを、ある意味で具現化したものとも考えることもできるのではないだろうか。そして双方の認識は互いにどのように影響しあっているのだろうか。

同じく商品価値のあるものには舞踊もあげられるが、観光地で行われているほかに、各地の保存会等で楽しみや連帯感を強めるものとして経済活動抜きに参加する人が多いと思われる。ここでは、博物館活動の研究に寄与することも念頭におき、物質文化としての工芸品にしぼって取り上げることにする。

現在のように日常生活から切り離されてしまった民族文化を再生するためには、民族誌や博物館に保存された物質文化(資料そのもの)と展示、言語学や民族学の研究者の知識や論文が、参考にされるようになってきている。博物館は、何をコレクションとして評価し、どう展示するかによっては、新しくつくられた「文化」に権威を与えるものなどとして、文化の再生に影響を与えているのだという認識を持って活動しなければならない時期にきているといえるだろう。

本文は、観光の場での工芸を中心に据えながら、その歴史的变化と社会的意味を探るための調査計画を模索する、研究ノートとしたい。

2. これまでの研究・調査事例

大正時代にまでさかのぼれる70~80年の歴史をもちながら、観光に関わる調査研究は断片的であり、むしろ研究としてあまり意味をもたないと考えられていたとさえいえる。なぜなら、これまでのアイヌ文化研究は近代国家制度の影響を受ける以前の「伝統的な」文化の復元に力が注がれてきたからである。

観光に関わる情報は、個々の研究者や観光業を担っている者の頭の中の知識であって、会話にはよくのぼったり、北海道在住者や研究者はそんなことは体験的に知っていて当然といった風があり、かえって歴史的・体系的に行われなかったのかもしれない。一般にも「古くて、新しい観光の問題は、研究対象としては、間口が広く入りやすいが、奥行きも広がりもとめどなく大きく、核心がとらえにくい。科学しにくい一面をもっている」といわれる〔財日本交通公社調査部 1994:i〕。

筆者は以前、アイヌの工芸品の変遷に和人がどのように関わってきたかについて、江戸

から大正期の文献資料をもとに、商品としての成立を辿ってみた〔齋藤 1994〕。市町村史等をたねんに読み返すなどの作業によって史実は集められる可能性があるが、国内の実物資料の収集史や民族学的情報が欠如している現状で、物質文化をとおしてアイヌ文化の変容や社会の変化を理解することは難しい。明治期の博覧会や外国人研究者の収集にともなって製作された工芸品やミニチュア・模型が、その後の工芸品の在り方に影響を与えたかどうかについて追跡したいと考えているが、まだ明らかではない。まとまった文献もないなかで、昭和期以降の工芸と観光の関わりについては、その変遷を記憶している人もいることから、現地での調査が必要かつ重要であることを痛感したところである。

これからの調査の参考とするため、観光をとおして展開された文化人類学の研究のなかでも工芸品を取り上げているものの一部を、アイヌの事例に限らず以下に紹介してみたい。

観光とアイデンティティの関係について、太田好信は国内の3事例（北海道平取町二風谷、岩手県遠野市、沖縄県石垣市）の分析から、観光を担う「ホスト」側の人々が、観光を利用しながら自己の文化ならびにアイデンティティを創造していることを確認し、「真正さ」や「純粋な文化」という諸概念の政治性を再考した。ここでは、和人にとっての木彫りは「自分たちとは違う、アイヌの民族性をそこに認めざるをえない…」、アイヌにとっての木彫りは「芸術家としての新しいアイヌ像をそこに創造する…」ものととらえられている。

また、それぞれの地域にある博物館を、遠野では「民話のふるさと」というイメージを「可視化させる装置」、二風谷では「アイヌの人々が生活する場所を確保するための運動の中心」となっていると指摘し、「展示品を提供する側の人々が、他者にたいして自己のアイデンティティを主張するために利用している」例とした〔太田 1993〕。

広く世界の民族を対象にしたものでは、早くから観光芸術研究に取り組んでいたN.H.H.グレイバーンの研究がある。次にあげるこれを受けた大村敬一の論文に詳しいこともあり、概略にとどめるが、そこでは先住少数民族の芸術を芸術形態のソースと志向先とのマトリクスで6種類に分類し、内外の促進力によって文化の変化やその民族社会での重要性において果たす意味合いが、普遍的に進化するものとして考察した〔Graburn 1976〕。

大村は、カナダ・イヌイットの彫刻とオーストラリア・東部アーネムランドのアボリジニの樹皮画を事例に、グレイバーンのモデルを検討している。ここではグレイバーンのモデルは、確かに芸術の変化の一般的な特徴を正しく描いており、「孤立して自立した」不変の「伝統的」芸術という神話を解体したという点で評価されるべきだが、芸術形態を外面的特徴から分類し、その一般的な変化を通時的に並べ、変化の要因を芸術以外のもので説明しているにすぎないとした。そして「芸術は、産業資本主義経済の導入によって商業

化され受動的な変化を受けているが、その変化を社会・文化の構造に投げ返し、その構造の次の「変化」を促す要因となっている」と指摘する〔大村 1996〕。

また、これに先立ち大村は、ネツリック・イヌイトの彫刻活動に関する研究報告として、イヌイトのカナダ国家や資本主義経済の世界システムへの編入という「近代化」の過程で、芸術は現金収入源となるばかりか伝統から近代化への橋渡しとしての役割を果たしてきたとその重要性に注目している。言葉の上での「彫刻」という概念や、彫刻をする動機、日常活動の中での彫刻の意義について、考古学、芸術学、歴史的研究に加え、参与観察も行っている〔大村 1995〕。

文化の継承(者)と民族社会のなかでの地位・役割について、窪田幸子はアーネムランドのアボリジニでは、権利を持つ男性にしか描けなかった神話の樹皮画を、女性も製作するようになったことに注目し、貨幣経済社会に適応した美術工芸品製作の在り方が、これまでの男女の役割の差や儀礼や富の蓄積などの社会構造を変化させる可能性があることを指摘する〔窪田 1996〕。

アイヌ文化やそれを担う人々をとりまく社会についてのフィールド・ワークはあまり多く無く、そのようななかで二風谷でのシュエバリ (Sjöberg) の研究は、観光についても聞き取りや参与観察を行い、文化運動として分析した貴重なものといえるが、言葉の解釈をはじめ気になる点は少なくない。

これより前、北海道ウタリ協会では1976年に文化対策部会が発足し、最初に着手したのが「北海道観光とアイヌ問題」であった。これは、「無関係にもかかわらずアイヌ語やアイヌ風俗などを観光施設や人格として利用している」等の諸問題を調査した結果、観光事業者・関係諸団体・地方自治体ならびに北海道商工観光部などの当事者に改善を要請し、解決のためには研究・講習などの方法を講じるという取り組みであった。実地調査は、説明板の表示や「酋長」として写真撮影や売店の仕事をしている人や経営者からの聞き取りなどを行っているが、報告自体は短いもので、観光ブームの定着したこの時期にもっと多くの詳細な調査が残されていればと残念ではある。しかし、問題の解明と改善の取り組みとしては、77年には北海道商工観光部長・民生部長から「アイヌ文化・風俗・風習等について、誤解、偏見を招く記述、説明をしないこと。」等を示した観光関係者宛での依頼文書「本道観光におけるアイヌ文化等の紹介について」を引き出し、行政官庁や観光関係者を集めた懇談会も開催されるなどの形で、成果をあげている。

近年では、東村岳史がアイヌが見世物とされてきた観光の歴史的経緯をたどり、「見られる側」と「見る側」との関係の歪みの形成過程を示し、今後の関係が変化してゆく可能性について論じている。観光にみる差別問題を正面からとらえた意欲的な論文であるが、著者自身、実態を検討するにはフィールドワークが不可欠だと述べ課題としている〔東村 1995〕。

このように、工芸と観光をめぐるテーマだけでも、文化と社会構造の変化やアイデンティティとの関係をとらえようとする研究が次々と発表されてきている。いずれの研究も示唆に富むものであり、これらのモデルを検証したり、比較検討するためにも、アイヌ文化と観光に関わるデータや事例をもっと集めるべきであると考えられる。

そして、このなかの調査方法として、大村の行なったある女性彫刻家の2日間にわたる行動の参与観察や、窪田のアートセンター（販売の仲介や技術指導等を行う機関）における個人の収入や生年のデータ収集は、正当かつ効果的なもので、良質の情報を得ることのできるものである。これらの調査が日本において可能か、調査ができたとしても報告が可能かと考えるとそう簡単なことではないように思われるが、参考にしておきたい。

3. 調査の項目と手法

調査手法が確立されていないのは、「観光」に関わる分野のみならず、より複雑に入り組んだ現代社会をとらえようとするときの一般的な課題ともいえる。特に社会学に関して日本におけるフィールド・ワークは、これまで技として確立されたことさえなかったとする指摘がある〔佐藤 1992: 27〕ように、民族学においても過去の伝承や技術に関する調査でなく現代を対象としたものは、まだ十分にすすんでいるとはいえないだろう。

文献を調べるにしても、いわゆる民族誌や学術論文ばかりでなく、さまざまな統計資料から観光ガイドやパンフレット類にいたるまで、情報が散在していて、多種多様の媒体からのアプローチが必要である。

組合組織や文化保存団体、観光地を抱える自治体などから統計資料や歴史そして将来計画を引き出していく作業は、事務的な内容に終始する可能性はあるが比較的受け入れてもらいやすく、まず行われるべきことであろう。

当然のことながら、多数の事業者や観光客から聞き取りやアンケートを行う前に、特定の人からじっくりと聞き取り調査を行い、問題点や考えられる回答をあきらかにする必要がある。

そして言説を集める一方で、数値化できるものは数字で表すなど客観的データを収集する努力が求められている。各々のバランスを考え、それぞれの課題を解明する手段として何が適当かを考えていくことは言うまでもない。

調査・研究の柱だてとして、以下のような項目をあげることができる。

①基礎データ

店舗数 観光に携わる人口とその特徴（年齢・性別・出身地など）
観光客入り込み数

②組織・流通システム等

公的補助・支援 行政の意向 文化保存団体 企業組合 卸問屋 見本市

③社会・経済的意味

歴史的変遷

日本及び地域経済における位置

売り上げの変化

仕事（観光業）に対する自己・他人の評価

民族文化理解（PR）の場としての取組み

④展望

技術の向上や継承のためのシステム 市場開拓

⑤理論の構築

他民族との比較分析による通文化的研究 体系的研究

具体的な調査方法や対象としては、以下のものが考えられる。

イ) 文献調査

民族誌・学術論文ほか、書籍として販売されているもの以外にも

北海道ウタリ調査、北海道・市町村史・市町村勢要覧、観光パンフレット類
新聞記事など

ロ) 関係機関での聞き取り等

市町村の観光商工課等 商工会 民芸品協同組合 北海道観光土産品協会

ハ) 観光の現場での参与観察・聞き取り・アンケート等

製作・販売する側／購入する側の意識調査

→「何が、なぜ売れるか」「何が、なぜ売りたいか」「何が、なぜ買いたいか」

工芸品に対しての説明（口頭・説明板・しおり等）

工芸品製作者のライフヒストリーの記録

ニ) コンクールや技術習得の場での聞き取り等

民芸品コンクールの役割（ウタリ協会の示す趣旨、部門の分類・評価基準、権威）
機動職業訓練

先に述べたように、特定の人からじっくりと聞き取りをすることは必要であるが、個々人が多様な生き方をするようになっているので、どのような人から聞き取りを行うかによって、工芸品に対する意義づけも自ずと違って来る。

同じく工芸品製作を行っている人たちも、いくつかのタイプが考えられ、季節や需要に応じて取り組むものを変えているという事例がみられる。まず、「芸術家」「工芸家」として*2個展を開いたり、公共的な場に展示するオブジェを製作したり、店に並べられるも

のでも看板がわりで、他の商品とは質の異なる「作品」を中心に手掛け、写真集や絵葉書を出したりする人がある。彼（女）らは、メッセージ性や写実性などに重きを置き、ことさら「伝統的な」アイヌ文化の様式を意識しない場合も多い〔飯部 1995：24-25, 231、知里 1995〕。これらの作品がいわば美術館向けとするなら、反対に博物館向けとでもいうべき*3、伝統の「復元」にこだわり、古いものを手本にしながら製作活動をする人もいる。そして、主としてみやげとしての工芸品製作を専門とし、商品開発をしながら、観光シーズン中は店頭での実演販売やネーム（名前）彫り等を行っている人たちがいる。みやげを専門とする人は人数的にも多く、観光の実態をよく知っている層と考えられるが、コンクールや展覧会に出品するための作品づくりをしたり、注文に応じて記念品のようなものを製作することがあり、夏季と冬季では従事する仕事やその内容が変わるのは、観光地に限らず北海道ではふつうのことといえる。そして、オブジェやレプリカ等を中心に製作している人でも、観光地に店を持っている場合が多い。

もちろん収入とは関係なく、たとえば舞踊や儀礼のための衣装や道具として着物や幣冠等を作る場合であるとか、個人的な趣味や手習いとして工芸品を製作する人も少なくない。このような在り方も、さまざまな調査をするなかで知る必要が出てくると思う。また、若い世代の取組み、世代間の考え方の格差などがあるのかどうかあわせて考えてみたい課題である。

4. 調査候補地

アイヌ文化を見どころとしている主な観光地には、阿寒町（湖畔地区）、弟子屈町（屈斜路市街地区）、旭川市（近文地区）、平取町（二風谷地区）、白老町（ポロト湖畔地区）、登別市（登別温泉地区・クマ牧場内）などがあげられる。

各地で行なわれている観光事業、その運営主体、中心となる施設・設備の規模などはさまざまであり、アイヌ文化の魅力というよりも、周辺の自然公園であるとか温泉・保養施設の有無などの他の観光資源と交通や宿泊の便といった条件により、観光客の動向は大きく変化していると考えられる。それぞれの地を訪れる人々の目的（関心）は異なるのか、どこでも同じと認識されているのかどうかについても興味のもたれるところであり、複数の地域において調査することができれば、より深く実態を知ることになるろう。

5. 課 題

フィールド調査の難しさはアイヌ文化研究全般にいえることで、研究目的が理解されやすいと思われる言語学の調査でもすんなりと受け入れてもらえるわけではなく、研究の成果を文化の伝承や普及活動などのかたちで話者側に還元していかなければ、調査の協力も

得られず、言語そのものの維持も困難になり、言語学研究にとってもマイナスになると考えられている〔中川・大谷 1995〕。ましてや、経済的なことが大きく関与する観光の調査については、十分に趣旨を理解してもらい信頼してもらえなければ、聞きとった内容のメモをとることや録音することさえ相手に緊張感を生み、率直な考えを語ってはもらえないだろう。研究のための研究であってはインフォーマントに理解してもらいづらく、観光活動やひいてはアイヌ文化にとって何が還元できるのかをともに考えていく姿勢を持っていなければならないと考えている。

その点で、観光客のニーズを把握するようなものは、観光にたずさわる側にとっても有益な情報を与えてくれる調査になるだろうと思われる。

また、報告の形を文書だけにとらわれず、さまざまなアウトプットも考えてみる必要がある。例えば、国立歴史民俗博物館制作・川森博司構成の映像民族誌（ビデオ記録）である『遠野民俗誌 94/95』は、ルポルタージュ番組などを見慣れている現代人にとって受け入れられやすく、さまざまな場面で文化再生への取組みの例として紹介したり、宣伝資料ともなり得る可能性がある。対象となった工芸品（商品）の図録を作成するのも一案であり、カタログとして通信販売や受注製作のために発展させられる可能性がある。博物館としては、研究の成果を実物資料をとおした展示の形で報告することも考えられる。実際、新作の工芸品を展示したときに、観覧者から「どこで買えるのか」といった質問を受けたこともあり、広く関心を持ってもらう機会にもなった。

そして、他の北方民族をはじめ、研究の過程で知り得た他民族・他地域で成功した事例を紹介し、アイヌの場合とは何が違い、取り入れられる点があるのかどうかなどを、分析していくことも互いのプラスとなるであろう。

今回整理した以上の事項を、調査の足掛かりとしていきたい。

注

- * 1 河野本道は『アイヌ史／概説』のなかで、「民族としての意識」「伝統的な文化要素」について次のようにとらえている。「ところで、生計を立てる必要から、観光業に関わり、工芸、縫製、刺繍、芸能、宗教などの諸面の〈再現〉に当たる者が居たり、あるいは、時折の祭儀の〈再現〉により、〈仲間意識〉ないし〈同族意識〉をとり戻したり、それによって心を癒したりするというような機会が得られることによって、単純に『アイヌ文化』が存続あるいは残存していると理解し、このような面を担っているということにもとづいて、自らを『アイヌ』と位置づける向きがあったが、そのような理解の仕方には問題がある。というのは、このような場合の文化要素は、古い『アイヌ文化』が新たな別の目的をもって〈再現〉された事例であるから、表面的あるいは形式的にはともかくとして、基本的には〈残存要素〉と区別されるべきであり、ここにおいて、〈再現要素〉と呼んでおく。」〔河野 1996：149〕

- * 2 作家といわれる人も、観光（土産物販売等）を生計のベースとしていたか、今もしている場合が多いと推測される。しかし、観光ブームの時、地元以外から仕入れたものばかりを売るのではなく、手づくりでこだわり、厳しい時代を頑張って乗り越えた人が、有名になっている〔阿寒町 1996：150〕と評価されている。
- * 3 ここで詳しい説明もなく美術館と博物館を分けて使ったが、この二つが西洋近代の制度の中で異文化の「もの」をある枠組みに分類してきたことについて、改めて見直そうとする研究が始まっている。佐々木千恵によれば、「まったく異なる専門領域が制度化されるに従い、博物館と美術館は、“部族のオブジェ”をそれぞれ民族誌の標本と芸術作品とに分類する。…中略…。美術館／博物館は、“部族のオブジェ”を再分類・再構成する際、博物館の背景にある専門領域については科学的関係を中心とし、美術館の背景にある専門領域については美的関心を中心とする。…中略…。だが実のところ、美術館／博物館は、近代的な文化概念を基盤としている制度であるため、差異を保ちつつも、相互に浸透可能なのだ。そして“部族のオブジェ”に芸術作品としての、あるいは民族誌の標本としての正統性を授与してきた。」としている。この指摘についても、いずれ考えていきたい〔佐々木 1995：169〕。

参考文献

阿寒町商工労働課・阿寒町木彫品開発センター・阿寒町商工会

1996 『阿寒クラフト民芸展 20周年記念誌』 阿寒町

飯部紀昭

1995 『アイヌ群像 民族の誇りに生きる』 御茶の水書房

太田好信

1993 「文化の客体化 - 観光をとおした文化とアイデンティティの創造 -」 『民族学』 57(4)：383-410

大塚和義

1994 「アイヌ民族にとって、観光はなにをもたらしたか - 近代国家日本の同化政策によるアイヌ文化の否定と肯定 -」（シンポジウム『観光の20世紀』抄録・国立民族学博物館）

大村敬一

1995 「「伝統」と「近代」のブリコラージュとしての彫刻 - ネットリック・イヌイットの彫刻活動に関する覚え書き -」 『人間科学研究』 8(1)：1-14

1996 「「再生産」と「変化」の蝶番としての芸術 - 社会・文化変化の中で芸術が果たす役割」 スチュアート ヘンリ編『採集狩猟民の現在』 言叢社

窪田幸子

- 1996 「女が神話を語る日 -オーストラリア、ヨロング社会の現在-」 スチュアート ヘンリ編『採集狩猟民の現在』 言叢社

Graburn, Nelson H.H.

- 1976 *Ethnic and Tourist Arts: Cultural Expressions from the Fourth World*. University of California Press.

河野本道

- 1996 『アイヌ史／概説』(北方新書2) 北海道出版企画センター 札幌

齋藤玲子

- 1994 「北方民族文化研究における観光人類学的視点(1) -江戸～大正期におけるアイヌの場合-」 『北海道立北方民族博物館研究紀要』3: 139-160

佐々木千恵

- 1995 「“部族のオブジェ” から<芸術>への変容」 『民族芸術』 11: 165-172

佐藤郁哉

- 1992 『フィールドワーク 書を持って街へ出よう』 新曜社

Sjöberg, Katarina

- 1993 *The Return of the Ainu. Cultural mobilization and the practice of ethnicity in Japan*. Harwood Academic Publishers.Switzerland

スミス、バレーン (Smith, Valene L.) 編

- 1991 [1989] 『観光・リゾート開発の人類学』 勁草書房 (*Hosts and Guests The Anthropology of Tourism.*, University of Pennsylvania Press.)

知里むつみ

- 1995 『アイヌ民族写真・絵画集成 第5巻 アイヌ民族の芸術 甦る精霊たち』 日本図書センター

中川裕・大谷洋一

- 1995 「フォーラム アイヌ語研究の現状と問題点」 『言語研究』108: 115-135

成田得平・花崎皋平他編

- 1985 『近代化の中のアイヌ差別の構造』(世界差別問題叢書3) 明石書店 東京

(財)日本交通公社調査部編

- 1994 『観光読本』 東洋経済新報社

ハンドラー、リチャード&ジョスリン・リネキン (Handler, R. & J. Linnekin)

- 1995 [1984] 「伝統、本物か? にせ物か?」 (川森博司訳) 『世間話研究』6: 1-25
(Tradition, Genuine or Spurious. *Journal of American Folklore* 97: 273-290)

東村岳史

1995 「「観光アイヌ」に見る和人のアイヌ民族差別」『解放社会学研究』9：65－85
ピープルズ・プラン・21世紀北海道

1989 「アイヌ民族の歴史と現状」『世界先住民族会議資料集』42－51 札幌
北海道ウタリ協会

1977 『先駆者の集い』14号

1977 『先駆者の集い』15号

北海道生活福祉部

1994 『平成5年 北海道ウタリ生活実態調査報告書』北海道

ビデオテープ

川森博司 構成

1995 「観光と民俗文化」(45分)『遠野民俗誌'94-'95』国立歴史民俗博物館制作